

めて“思いつき”あまりスタッフにも説明せず
に始めたものが多いと思い反省した一方で、子ど

もの遊びは“思いつき”で始まるものの方がおもしろいのかもしれないと思直した。

COLUMN

ヒプノセラピー

青木 桃子

埼玉県立精神医療センター

昨年、私は実母からのトラウマを幼少期から受けた方と出会い、何十年も囚われてきたイメージがヒプノセラピーを受け、とても楽になって生きられるようになった、ぜひ学んでほしい、と言われた。以前、自分自身も辛かった時期に、アメリカの精神科医のブライアン・ワイス博士が書いた「前世療法」を読み、こんな世界もあるのかと興味は持っていた。そして昨年、私自身も催眠療法（ヒプノセラピー）を学び、また実際に受けてみて、リラックス法を学び、そして自分の過去の感情体験を修正して体験し直したり、なぜその経験をしたのか自分の潜在意識からのメッセージを受けたりと、私にとって

は安全で良い体験をした。この治療法では、他から強制されることもなく、自分自身を信頼する体験につながるように感じた。進め方は大体以下のようである。クライアントの困っている点をお聞きし、また今までの生育歴をお聞きし、催眠療法の説明を受けて合意を得られた時のみ行う。（ただし統合失調症など、自我境界のあいまいな方の適応は難しいように思う。）まず、深呼吸し、安全基地、楽園のイメージをしっかりと体感してもらう。その後、催眠下で、クライアントがその時見る必要があると感じる過去、または過去世を思い出して話してもらう。そこで家族など重要な人物と話し合ったり、相手の気持ちに気

付いたりし、本当はクライアントがして欲しかったような許しや和解を行っていく。時には実母でなく、グレートマザーのような存在に癒されることもある。最後に自分の潜在意識から自分が学んだことを受け取り、終了する。催眠療法家は黒子に徹することが大事である。

アメリカの教科書でも、標準的な精神科治療法に組み入れられており、分析が有効でない場合に用いられたりする、と書いてある。

今後、こういった治療法も、統合医療としてもっと行われるとよいのではないかと感じている。

(あおき ももこ)

〈シンポジウム6〉

「子どもの育ちをめぐる地域集団と治療的集団 —学童保育の今日的意義—」

司会 早苗 麻子（萌クリニック）
河合 健彦（札幌市児童心療センター）

シンポジスト

- S6-1. 子ども時代をイキる児童会館の可能性
山田 弓人（公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会／札幌市中の島児童会館）
- S6-2. 民間学童保育での子どもたちの生活
菊地 千佳子（札幌市学童保育連絡協議会）
- S6-3. 子どもを見つけだすこと、そしてグループを信じられる経験を提供すること
渡部 京太（国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科）
- S6-4. 発達障害の子どもを育む放課後生活—学童保育が新しい可能性をひらく—
二通 諭（札幌学院大学人文学部人間科学科准教授）

—2013.10.11 札幌コンベンションセンター—

- 結果保護者と子どもの距離を切り離すのではなく、いっそう緊密なものにしています。
- ③親たちが子育てへの不安を共有でき、将来展望を上級生学年の姿を通して自分の子どもに投影し、上級学年の親たちは過去の不安を思い出話として語ることでお互いの子育てが継承されています。そこに指導員が介入することで、悩んでいる親同志を意識的に出会うようにすることもできます。
- ④保護者も「遊びきる」「体を使って汗だくで走る」「楽しくてワクワクドキドキ」などの体験がなく育ったケースでは、子どもの遊びを通して「自身の育ち直し」の場面も見られます。(再婚などでの実子ではない子育て)
- ⑤親の集団作りをモデルに子どもたちが群れて自然な集団形成につながります。

『居場所』とは、空間のみではなく心から安心でき全てを投げ出しても受け入れられる空間であって欲しいと思っています。現在は家庭においても緊張が取れず、学校では教育で精一杯の状況では、放課後の数時間で「共に育つ集団」が必要であり、学童保育にはまだそれが残されています。唯一残されています。

今回、大きな学会で発表させていただく中で、自分自身の考えをまとめることができました。子育てや親子のかかわりに合理的なことはあてはまらないということです。手抜きができないのが子育てであると思います。人と人がふれあい目をみて頷き、優しく微笑み、抱きしめその手のぬくもりや相手の匂いも感じ取り…安心という信頼関係を結びながら親子になっていくということです。どこかでその過程が抜けてしまうと補充が必要で、周囲の大人が補充することをしなければならないという覚悟です。

「子どもがかわいそうでしょう」と言うと「私だってかわいそうでしょう」という若いお母さんたちを何とか地域の中で救って行きたい…救って行かなければならぬと決意させていただきました。そんな子育てが残っている学童保育を守って行きます。

S6-3. 子どもを見つけだすこと、そしてグループを信じられる経験を提供すること

渡部 京太

国立国際医療研究センター国府台病院
児童精神科

I. はじめに

国府台病院児童精神科病棟での入院治療を行う主な対象は、前思春期の子どもである。入院治療は、停止あるいは回避していた同年代集団との再会の場となり、かつて挫折の苦い思いを与えた仲間集団体験や学校体験をやり直す機会を提供する。以前入院治療を受けていた子どもの多くは神経症闇の登校拒否児だった。「学校に行かなければならぬけど行けない」という強い超自我不安に脅かされ、「葛藤」し悩み入院に至ったと考えられる。しかし、この数年に限っても入院してくる子どもの雰囲気はずいぶんと変わってきていている印象がある。その子どもの変化は、①リーダーシップを發揮し大人（治療スタッフ）に対決を挑むような迫力を持った子どもが減ってきている、あるいは素直、従順に見える子どもが増えている、②子どもは大人との交渉の仕方をほとんど知らず、大人から何か言われると「どうせ自分のことをわかってくれない」とすねることもなく、むしろ「何を言っても無駄」と初めから期待はしないというよう大人に頼ってこなくなってきた、③自分のよいところを見つけだされることをひっそりと待っている子どもが増えてきている、などといえるだろう。①②については、子どもが集団場面でいやな体験をしてきたために、グループを恐れたり、グループの中で前面に立つことを避けるようになったということと関係があると考えている。子どもが自分を作る作業には、病棟の中で大人（スタッフ）に見守られながら、仲間集団でもまれる「葛藤」を体験し、「グループを信じられる」という感覚を得ることが必要だと思う。「グループを信じられる」という

ことは、グループに参加しているメンバーひとりひとりを信頼できるという意味ではなく、グループが問題を解決していく力をもっており、そのグループが問題を解決していくというプロセスを信頼できるということである。学童保育と直接関係するわけではないが、シンポジウムでは児童精神科病棟で行われている治療グループのプロセスを示し、グループを信じられる経験を提供することの意義について、実際のグループの運営の仕方について述べた。

II. 「グループを信じられる」という体験の原点 —たまり場での経験—

筆者が初期研修をした大学病院の外来予診室には、ファミコンが置いてあり、外来診療の合間に治療スタッフや子どもが過ごせる場「たまり場」があった。森岡（森岡, 1996）が「たまり場」について報告しているが、「たまり場」を成立するためには、①居場所を提供すること、②大人が見守っていること、③あいそうな子どもを組み合わせることが最低限必要になるだろう。

III. 臨床素材：『KAZU グループ』

平成25年度の病棟の中学生男児は、ギターを弾く音楽が好きな子どもとスポーツが好きな子どもの2つのグループがあって、夜になると病棟のホールのテレビの前に集まってカップ麺を食べながらよく雑談をしていた。ギターは弾けない、運動が苦手で、男児の仲間集団に入れずに浮いている、むしろいじめられている子ども

が数名いた。前述したカップ麺をたべる男児集団に入れない子どもを集めて開始したのが、『KAZU グループ』である。このグループは、運動が苦手な子どもが集まって、サッカーの三浦知良選手（カズ）の発言について感想を述べあうという目的で開始された。このグループの名称は、平成25年3月まで国府台病院にお勤めになっていた齊藤万比古先生のお名前から一字もらい、三浦知良選手のニックネーム“カズ”とひっかけて、『KAZU グループ』とした。グループは、病棟から離れた外来の一室で、2週間に1回1時間行った。グループは、①メンバー全員で『KAZU グループ』の漢（おとこ）の掟を読みあげる、②カップ麺を食べる、③カズのことばについて感想を述べあう（選んだカズのことばを表1に示した）、④再び漢の掟を読みあげるという順で進んでいく。漢の掟は、『壱. このグループに一度参加したら抜けられない。弐. 話したことは、外で漏らしてはいけない。参. このグループで学んだことを命がけで実践する。肆. “死して屍（しかばね）拾う者なし。”』から構成されている。漢の掟の肆は言わずと知れた“大江戸捜査網”的隠密同心心得之条から借用した。メンバーは、筆者が声をかけて集め、その後は参加している男児が『KAZU グループ』にあいそうな男児を誘い追加していく。スタッフは終身名誉監督として筆者、メンバーを集めたり、秘密が守れるかどうか見守ったり、カップ麺を準備する介錯人として病棟の男性看護師が参加した。メンバーは表2に示した。

表1 三浦知良選手（カズ）のことば

第1回	「足に魂込めました」「可能性は1%あるんですね？じゃあ、僕はその1%を信じます」
第2回	「鍛えた蓄積があれば、長く続けることができる」
第3回	「ほんとうの敵は自分自身なんだ！」
第4回	「人生は成功も失敗も五分。あきらめないことが肝心」
第5回	「築いた過去を大切にし新しいものに挑戦する」
第6回	「真剣にやる中でも遊び心をもってみたい」

表2 「KAZU グループ」のメンバー

メンバー	学年	診断
A 君	中学3年	統合失調症
B さん	中学3年	自閉症性スペクトラム障害 気分変調症
介錯人	児童精神科病棟看護師	
C 君	中学2年	頭部外傷後遺症
D 君	小学6年	注意欠如・多動性障害 気分変調症
終身名誉監督	児童精神科診療科長	
E 君	中学2年	自閉症性スペクトラム障害、社交恐怖
F 君	小学6年	全般性不安障害

A君の実父は、A君と母親に暴力をふるつていた。母親はA君の兄といつてもいいような年下の男性と交際するようになった。その後両親は離婚し、母親はその年下の男性と再婚した。A君は学校でいじめにあい、徐々に被害妄想や幻聴が出現し不登校になった。継父から「気合いがたらない」と暴力を受けるようになり、希死念慮や自傷行為がひどくなり、中学2年の冬に入院になった。ミリタリーゲッズ、自衛隊をこよなく愛している。

Bさんの両親は別居中で母親と暮らしている。Bさんは成績がよく、高学年から学級委員を務めてきた。中学2年でも学級委員をしていたが、だれも言うことを聞かなくなったり。ルールを守らないことや学級委員が責任を背負うことに疲弊して、2学期から不登校になり、中学3年春に入院になった。病棟ではさん付けされているが、一目置かれているわけではなく、理屈っぽいので距離を置かれている。『KAZU グループ』のまとめ役である。

C君は発達のバランスが悪い子どもだった。2度交通事故に遭い、記憶障害が出現するようになった。周囲からは変わった子どもとみられていじめにあい、中学入学後に不登校になった。「まわりが僕をはめようとする」といった被害関係念慮や悪口が聞こえるという幻聴が出現し、中学2年春に入院になった。どうも多数の“口

り画像”を隠し持っているようである。

D君の父親は、D君と母親をひどく叱責することが常だった。D君はいじめにあい、小学4年から不登校になった。父親からのD君や母親への叱責はひどくなり、D君の母親はD君を連れて家を出た。その後母親には恋人ができて3人暮らし始まった。その後D君は家に居づらくなり、素行の悪い子どもと親しくなって反抗するようになった。さらに抑うつ的ななり自傷行為を繰り返すようになったため、小学6年春に入院になった。

第1回は、A君、Bさん、C君、監督、介錯人の5人が集まつた。D君は実父が急死したために参加できなかつた。男児たちはカップ麺を作るが、とても不器用だつた。監督は三浦知良選手を知らないのではと危惧して用意した映像を見ながらカップ麺を食べた。監督が(『足に魂込めました』というカズのことばをどう思うか?)と尋ねると、男児は「ピンとこないです」と話し、Bさんが「卒業したらこのグループはどうなるのですか?」と語つた。A君、C君がオウム真理教の“麻原彰晃”的歌を歌い始めた。A君は「1%は可能性がないということじゃないですか?」、Bさんは「カズはブラジルにプロになるために留学したそうですが、ぼくらはせいぜい家から病院ぐらいの移動です」と語つた。監督が(みんなの魂を込めてい

ることは何か?) と尋ねると、Bさんは「ガンダムのプラモデル」、C君は「ロリ画像を集めている。1700枚あります。8割は魂込めています」と答え、A君は「先生は尊師」と語った。監督は(損して死んじゃうみたいで嫌だな)と答えると、A君はうれしそうに「エアガンやミリタリーグッズが好き」と語り、監督が(やばい集まりになってきた)と言うと、Bさんは「変態とミリタリーとガンダム。僕はみんなを接続プラグとしてつなげられます」と語った。さらに監督が(どんな努力をしている?)と尋ねると、C君は「エロい動画も見ています」と話し、Bさんは「世間のルールは守る。死して屍捨う者なしとつながるなー。予想外の展開でした」と話し、A君は「いい感じじゃないですか。一度入ったら抜けられませんから」と話した。監督が(最終的には足に魂をこめて、悪いことをしないで踏みとどまるという方向でいいでしょうか?)とつなげると、3人は「こりゃ、楽しみだ。食べたというのがばれないようにならないといけない」とうれしそうに病棟に戻っていった。ところが、第1回が終わった夜に『KAZU グループ』存続の危機が起った。A君とC君が病棟の自分たちの部屋でペニスを出してつけあい、同じ病室の他児にも一緒につけあおうと迫る事件が起こった。

グループ解散の憂き目を見ることなく迎えた第2回では、D君が加わった。怪訝そうな表情のD君だったが、テーブルに並んでいるカップ麺を見て「しあわせ」とうれしそうに話した。A君はD君に「しあわせですか?」と言い、A君とC君は“同期の桜”を歌い始める。D君はわけがわからないようで、床に寝転がっている。監督が(みんなの蓄積は何か?)と尋ねると、A君は「ミリタリーグッズ」、Bさんは「話しあい系もそのうち役に立つようになる」、C君は「1700枚のエロ写真を600枚に減らした」と語り、一同で「数を減らすことは蓄積がないとできないことだ」と感心した。A君とC君“探し物はなんですか”を歌い、指と指をふたりであわせて「ET」と話し大喜びだった。

A君が「剣道をやっていたけどいじめられた。講師がほめてくれた。そういう蓄積があつて生きている」と話すと、D君が「おれもいじめられていた」と語り、グループはさみしい雰囲気に変わった。監督は(君たちから見てスポーツや音楽ができないけど秘密を守れる子どもを探すように)と伝えた。

第3回では男児から推薦されたE君が加わった。E君は学級委員を務め、勉強もできて信頼されていた。中学校は吹奏楽部に入部したが、先輩から嫌われていると気にするようになり、徐々に不登校になった。吹奏楽部は全国大会に出場したため罪悪感が強まり、自宅の押し入れにひきこもりゲームをする生活を始めた。家族を一切拒絶するようになったため、中学2年の春に入院になった。病棟では“ゲーム廃人”と呼ばれている。

Bさんは「回を重ねるごとにひとりずつが増えていく」と喜び、「秘密を守れるかな?」と新メンバーに会の進め方を説明した。D君が「今日は誕生日だー」と話し、みんなで“ハッピーバースデイ”を歌った。Bさんは少しあみしそうに「祝ってもらえるのはいいよ。自分は祝ってもらえないような気がする」と語った。監督が(今回のカズのことばについてどう思うか?)と尋ねると、C君は「あきらめている」、E君は「楽な道を選ぶ」、Bさんは「人生は自分との戦いだと思います」、A君は「剣道をしていた。相手が攻めてきたら、よける。自分との戦いですね」とそれぞれ話した。すると突然D君が「エッチなことばに聞こえた!」と床に転がり始めた。C君は「画像なしでも、がんばってオナニーしています」と話すと、一気に男児部屋のマスターべーション事情が話された。もりあがっていたC君は「なんだよ。オナニーなんていいやがって」と急に不機嫌になり、監督は(病棟に戻ってからけんかするなよ)と釘をさすと、Bさんは「理性を保って病棟に帰ろう」と話しグループは終わった。

第4回のカズのことばに対しては、A君が「失敗の方が多いですね」としみじみ話し、前

回のもりあがりとは打って変わった様子だった。監督が（うまくいったことはあまりない？）と尋ねると、D君はグループの雰囲気を和ませるようにメンバーが残したカップ麺のスープを集めて飲み出した。E君はぶっきらぼうに「失敗してうまくいかない人がここにいる」と語る一方で、Bさんは「自分との戦いです。先週の『ほんとうの敵は自分自身なんだ！』ということばと重ねて考えている。復活のルートに進んでいると思う」と語った。監督が（他のメンバー入れる？）と水を向けると、D君が「F君」と話し、F君をメンバーに加えることが決まった。

第5回からF君が加わった。F君はひとみしりが強くおとなしい子どもだった。小学4年から不登校になった。他の子どもを避け、外出しようとするとうずくまってしまうほどになつたため小学6年春に入院になった。嫌がっているF君を見て、Bさんが「『風評被害』を受けるに値するようなメンバーが集まっている」と話し、監督が（このグループはやばいメンバーが集まっている？）と尋ねると、Bさんは「『風評被害』を受けている。何をやっているのかわからないから想像をかきたてている。きわめてよくないことをしている“危険集団”だと思われている」と語った。Bさんが続けて「なぜ『風評被害』が起こるか？」と話すと、「C君がロリコンだから」「D君がいるから」「F君がゲーム廃人だから」とメンバーは「風評被害」を受けている理由を互いになすりつけあつた。メンバーは「嫌な思いをしてきた」と話し、D君は「あんまり新しい挑戦はしたくないような気がする」と話したが、Bさんは「山あり谷ありありましたけどステップアップしよう」と前向きな発言でグループは終わった。

第6回は、A君が不在だった。偏食があるBさんはガーリックがきいているカップ麺を食べられず、他のメンバーはBさんのカップ麺を奪い取るように食べ始めた。監督は、Bさんのために別のカップ麺を用意した。カップ麺を食べながら、D君は病棟の中學3年が参加する男

子グループの話題にふれた。A君、Bさんは男子グループに参加していない。D君が「男子グループでは、彼女とかの話しをしている。『KAZU グループ』でも彼女の話しをしませんか？」と話すと、Bさんは「“リア充”とかはほっとけ。われわれはわれわれの道を行く。せいぜい2次元だ」と話し、C君は「男子グループはかっこいい」と言い、Bさんは「独自性が大切じゃないか！」と反論した。監督は「君たちに彼女をつくるなんて、無理。無理」と無慈悲に大笑いした。今回のカズのことばに対しては、「ゲームを真剣にやっている。ポケモンのゲームで“卵を孵化（ふか）”させている」「保健体育は大好き。特に保健」と語った。するとC君が「お前らは“卵を孵化させている”と言っているけど、卵を産ませるためにポケモンを妊娠させているんだ」と言い放った。しばらくの沈黙の後、D君は「どこかにつるされていて、間違うとマグマに落とされて死ぬという夢を見る」と語り、Bさんは「将来、何を目的にやつていったらしいのか？宇宙がどうやってできたかまで考えこんでしまう。大舞台で何かをやることになり、期待されていたのに、突然だったので失敗して怒られるという夢を見ることがある。今の世界はなにからどうやってできているのかと考えこんでしまう」と語り、D君は「どうして人間が生まれてきたのか？親が子どもをほしかった」と言い、Bさんは「以後、連鎖」と話した。E君はあきれたように「みんな、うつ病だね」と話し、C君は「親の親の原点は交尾」、Bさんは「真剣にやる中にも遊び心を持ってみたい」と語った。監督が（交尾と褒美のことばかり考えていてはダメですよ）と話すと、D君は「どうしてエロいことを想像してしまうのか？いつどこで覚えたのかが問題です」、Bさんは「それは本能に刻まれている」と語った。『KAZU グループ』の漢の捷を読み上げる時に、E君は「伍。C君はしゃべってはいけない」、C君は「伍。人の話しを聞く」と勝手につけ加え、グループは終わった。

IV. グループをふりかえって

『KAZU グループ』は、児童精神科の責任者である診療科長と選ばれた漢で始めたグループである。筆者がなによりも驚いたことは、メンバーが中学生男子のグループと同じように前思春期から思春期の子どもが集まつた時にするような話し——異性への関心や性的な話し、自分の出自への興味や将来の不安——をいきいきとするということである。『KAZU グループ』のメンバーが、家族関係や仲間関係で苦しんでいながら強く仲間を求めていること，“漢の掟”やカップ麺を食べているという秘密を必死に守っていること、病棟内の“風評被害”に苦しみながらだめそうな仲間を見つけだしてくるメンバーの目の確かさにも改めて驚かされた。第6回でD君は「間違うとマグマに落とされて死ぬ」という夢、さらにBさんが「大舞台で何かをやることになり、期待されていたのに、突然だったので失敗して怒られる」という夢について語っているが、これが入院している子どもが感じている集団に対する不安——グループの中で前面に立つと周囲はついてこなかつたり、うまくいかないと怒られたり真っ逆さまに転落するように周囲から孤立してしまう——を表していると思われる。

『KAZU グループ』はメンバーにどのような体験をもたらしたのであろうか？

診療科長に選ばれたメンバーは、カップ麺を食べるといった特別扱いを受ける一方で、“漢の掟”を守らなければならぬ。“漢の掟”的「肆、死して屍拾う者なし」を読み上げ、グループの中でも監督からは「大丈夫」といった安っぽい慰めではなく、「おまえらはだめだ」と伝えられる。さらに病棟では周囲からの“風評被害”に悩まされる。家庭や学校で孤立していたメンバーにとって、“死して屍拾う者なし”という掟のことばは意外と実感に近かったのかもしれない。メンバーにおどろおどろしい掟を読ませる枠組みやカズのことばに話題を戻す監督の態度は、メンバーの超自我不安を賦活した

かもしれないが、“風評被害”を受け、「おれたちはだめだ」と言いながら身を寄せあつて生き抜いていくという機会を提供したと考えられる。『KAZU グループ』を開始してから、A君、Bさん、D君は病棟ミーティングのいすを並べてくれるようになり、コンダクターである診療科長の左右に座るようになった。メンバーは、『KAZU グループ』を通して、“グループを信じられる”経験をしていると考えられた。筆者は、“グループを信じられる”経験をしないと、仲間意識というものは生まれてこないと考えており、このグループではメンバーが、“漢の掟”やグループの秘密を守ることが、グループの結束力を高めることにつながつたと思われる。A君とC君がペニスをつけあつたり、第2回では映画の“ET”的に指をあわせたりしていたが、これは仲間ができるとでもうれしかったのだろう。『KAZU グループ』を通して仲間ができたという体験は、“死して屍拾う者なし”という恐ろしいことは起こらないという安心感につながつたと考えられる。さらに第6回の最後では、メンバーは勝手に掟をつけ加え、監督をおそれずに自由にふるまえるようになっている。小此木（小此木・相田、2006）は相田との対談で、グループについて「フロイトからエリクソンが使っているアイデンティティということばは、世間で言われているような個の自立を語ったことばではなくて、いかに人が集団に支えられたときに心が安らかになるか、という集団と関わっている居場所のある自分を意味するのがアイデンティティです」と述べているが、グループに受け入れられたという新しい体験が大きな意味を持ち、安心感につながり、その安心感が自分を作る礎になると考えられる。

集団精神療法がめざすことは、まとまりのよいグループや大人の思い通りに動いてくれるグループを作ることでは決してない。また、グループの圧力を強くしないことも大切である（鈴木、1999）。第6回ではBさんはカップ麺を食べられずに、監督は別のカップ麺を用意した。

筆者は、「KAZU グループ」でなければ、「カップ麺は他にないから食べなさい」、もしくは「食べられないなら食べなくてもいい」という対応をしていたように思う。別のカップ麺を用意するという対応は、学校のような規律を重んじる集団ではなかなか許されないことだろう。個人精神療法では、「依存欲求を治療の中で理解はするが、満たそうとしない」という態度が求められる（生地、1997）。集団精神療法は、知らず知らずのうちにみんなが同じ行動をとらないといけないというようなグループの圧力が強くなつて硬直した体験とは違つた。別のカップ麺を用意してもらいグループに直接的に受け入れられたという新しい体験を子どもに提供できる可能性があると言える。

スーパーバイザーとしてご指導いただいている鈴木純一先生に深く感謝申し上げます。また、本稿は2013年9月に東京で開催された小寺グループ理論セミナーに提出したケースを基にしました。討論していただいた先生方に感謝申し上げます。

文 献

- 森岡由起子（1996）：「たまり場」を利用した青年期患者の検討、齊藤万比古、生地新（編）：不登校と適応障害（pp.29-46）、東京、岩崎学術出版社。
- 生地新（1997）：精神療法過程における「自分」について、北山修（編）：日本語臨床2「自分」と「自分がない」（pp.37-53）、東京、星和書店。
- 小此木啓吾、相田信男（2006）：集団は信じられるか—フロイトの集団論をめぐって、相田信男（編）：実践・精神分析的精神療法（pp.225-249）、東京、金剛出版。
- 鈴木純一（1999）：集団精神療法の臨床的意義、近藤喬一、鈴木純一（編）：集団精神療法ハンドブック（pp.67-77）、東京、金剛出版。

S6-4. 発達障害の子どもを育む放課後生活 —学童保育が新しい可能性をひらく—

二通 論

札幌学院大学人文学部人間科学科准教授

*本稿は筆者が指導したゼミ学生の卒業論文を援用したものである。

I. 問題の所在と課題

社会性の障害と発達にアプローチする教育内容と方法の確立は喫緊の課題である。即座に想起できる方法としてソーシャル・スキル・トレーニング（以下 SST）がある。

文字どおり社会的スキルを身につけるためのトレーニングであり、あいさつの仕方や使い分け、礼の仕方、謝り方、自己紹介の仕方、さらには勝敗への対応等々、多岐にわたる。たとえば、自分の感情や意思を怒鳴るような口調で表現する場合は、相手を怖がらせることになり、穏やかな口調で表現するトレーニングが必要となる。この状態が続くなら、社会生活のみならず、発達障害などの自助グループの参加さえままならなくなるからだ。

但し、SST のみに社会性の教育を任せるわけにはいかない。SST も社会性の教育の重要な構成部分であり、その積み重ねによって大きな効果が期待されるが、教育活動における実際の運用においては断片的な実践に留まる可能性がある。人格の形成や全生活に貫通する本質的な力の獲得をめざすものとは言い難く、そもそも、性格上そのような任を負わせるべきものではない。教育活動上の位置づけは、本質的な力の獲得と相俟って、細部の詰め、換言すれば細部の補修に用いられるべきものだ。

筆者（2010）は、社会性の障害や困難を抱える児童生徒に通底する2点の特徴、すなわち、①人（他者）の意図や感じ方を推し量ることが苦手であること、②現実場面におけることばの用いられ方についての理解が不十分であること、

